蓮華王院觀米田新八郎大矢數

徹宵講武飾承平　萬失爭飛激電輕
列炬然天人蟻集　叫呼伊豫湯桁聲

本詩は所詠の年月を詳にせざるも、新八郎の矢數は元祿十七年以降五度に及べり。卽ち左表の如し。

(1)元祿十七年五月二日至三日
五千三百四十本(二千七百七十九本)

(2)同年同月廿五日至廿六日
一萬二千廿五本(六千四百廿五本)

(3)寶永三年四月廿五日至廿六日
四千六百九十八本二千三百廿一本)

(4)同年五月十五日至十六日
九千三十九本(四千二百八十二本)

次回の矢數は寶永四年四月なりき。日次記その樣を述べていふ。

廿　日　米田新八郎從今酉刻矢數にして
廿一日　今十刻畢惣矢一萬四千五十九本
通矢六千二百三十三本

新八郎は當時の權臣柳澤氏の臣にして、紀州家の威名を奮て主家に歸せしむべく鋭意努力せし者の如し。されば其の矢數の日に於ける勢力頗ぶる見るべし。

當時松平美濃守(御側衆威勢ノ人也(家來タルノ故略)中從公儀モ警固之役人雜色等數多其外從所司代モ役人等出也誠近代無比類事共也(元祿十七年五月二日條)

當時美濃守家來ニテ、所司代町奉行ニテ馳走格別ニ候(寶永四年四月十四日條)

從つて新八郎の決心極めて堅く誓て大八郎の上に出んとす。第五回の擧未だ通矢に於ては千九百本の差を免れざりしかば、更に六年五月を以て矢數を試む。されど天命に及ばざるものか失敗に了り、次で「松平甲斐守殿浪人」(日次記八年六月)と呼ばるゝ身となりぬ。好漢終に失脚を免れざりしなり。(米田氏の家系最期等はすべて知るを得ず)。

月堂見聞集卷二ニモ寶永四年ノ矢數ヲ記シ弓三十張ヲ用ヰ惣矢一萬四千二百四十九本(通矢六千三百二十三本)トイヘリ。

六

終に江戸深川に於ける矢數を附記せんに、此地に於ても百射千射及矢數の別あり。いづれも京のそれにならへる事いふを俟たざるべし。閑餘雜記にいふ。

於深川諸家々中數矢之事

文化四年四月十六日江戸深川於三十三間堂

千射　長屋忠左衞門

通矢數　七百十四本

是迄(略)(中)江戸一と申は六百十三本之所(略)(中)大手柄……

右同日

百射　小十人組　加藤鎌吉

通矢　八十本(略)(中)

四月八日卯刻より射始申刻射終惣矢三千七百五十七(内通矢七百四十九本)此分合一分九厘九毛　(卷之三所載)

本文に長屋氏を推賞したれど、帳中漫錄に後藤常藏(千射八百九本通)の如きあれば深く言ふに足らざるなり。

江戸に於ける通矢の優勝者を「江戸一」といひ京の「天下一」と分つ。嘉永五年三月十九日姫路藩士鶴田正時一萬五十四本を射て五千三百八十三本の通矢を得しを最とすといふ。(史學雜誌九之五所收同氏傳)左に帳中漫錄卷十の一節をあげて、當所大矢數の概を示すべし。

江戸深川八幡社通矢姓名

(前略)

元祿十年四月十八日　同　一萬五百十五本　酒井雅樂頭内　町田小助

同　(通矢ナイフ)　五千三百五十三本

(中略)

同　一萬本　同五千三百六本　同　五千三百六本

同　九千九百四十七本　同　五千三百一本　伊達遠江守内　福井儀右衛門

同十四年丑四月十六日　酒井修理太夫内　鈴木萬右衛門

（中略）

同　九千百五十九本　同　五千三百六十八本　杉立信吉

（下略）

按ずるに本書の傳少しく疑ふべきものあるが如し。今はたゞ京のそれと對照せしめんがため、試みに引けるのみ。

風俗史の研究
定價金四圓貳拾錢

昭和四年九月五日印刷
昭和四年九月十日發行

著作者　櫻井秀
發行者　東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地　大葉久吉
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　竹内喜太郎

許製

發行所　東京市日本橋區本銀町三丁目　振替貯金口座東京二八〇番　株式會社　寶文館
關西專賣　大阪市西區阿波堀通四丁目　振替貯金口座大阪四三番　株式會社　大阪寶文館

日清印刷株式會社印刷

東京高等學校教授
日本拓殖大學教授　文學士　淺野利三郎著（最新刊）

最新參考 西洋大歷史

菊判布裝上卷
定價金六圓
送料金廿四錢

本書は邦文西洋歷史參考書中最大最新のもので一般史たると同時に文化史である。西洋史參考書の必要條件は(一)詳細なる一般史の記事と其の文化史的解釋(二)新學說の批判と史實の訂正(三)文部省教授要目との連絡等である。隨つて最新流行の文化史は教員檢定受驗又は實際教授上の參考書とするに不適であり、一般史は政治史戰爭の記事のみで興味が無い許りでなく文化的解釋と史實の批判力に乏しい。本書は流麗なる文章を以て興味ある史實と文化の發展を叙述し從來の參考書や文化史に缺けて居る埃及、メソポタミヤ、エーゲ文明等を精叙し政治史と文化史との相關性を説明し、今まで注目されなかつた古代中世各國の經濟狀態を闡明して如何なる經濟的基礎の上に如何なる政治と文化とが發展するかを理解せしむるに努めた。高等諸學校教科書、中等學校教授用、文部省中等教員檢定受驗參考書としても、一般の人士の讀史用としても有益な一大快著である。

◇文學士 鳥山喜一著　**東洋史觀**　菊判布裝定價金四圓八拾錢　全一冊　送料金拾八錢

◇文學士 青木武助編　改修　**日本大歷史**　菊判布裝定價金六圓五拾錢　全一冊　送料金參拾錢

◇文學博士 村川堅固著　英語索引　**西洋歷史地圖**　洋裝定價金貳圓參拾錢　全一冊　送料金貳拾錢

東京　寶文館　大阪

東京帝國大學教授　文學博士　吉田靜致
東洋大學教授　文學士　小野正康　共著（最新刊）

西洋倫理學史（近世篇中）

菊版布裝一冊
定價金三圓五拾錢
送料金拾八錢

學界の金字塔

本書は西洋倫理學史の第三卷である。本書は吉田博士の帝大に於ける講義を、共著の目的を以て小野學士が筆記し、學士はそれを講案として大學專門學校に於て講義し、特に炳として輝く國史の認識からといふ見地に立つて諸種の文化史的轉移を眺めかくして學校の講義とは趣を異にすべき著述の體裁に再構成したもので、いはゞ博士の經と學士の緯とで織りなされたかの如きものである。第三卷「近世篇中」は、第二卷「近世篇上」(世の多くの著者が除外する十四・十五十六の三世紀間の過渡期の諸相、特に宗教改革並に思想家の苦難等を叙べて、近世文化の芽生を明にしたもの)をうけて而してこの近世文化の花の咲いた十七・十八の兩世紀特に政治的文化時代に於いて、英國に勃興した經驗論的な倫理學諸說卽ち今日に於いて倫理哲學宗教の中心思想をなす諸學者の思想を史的に詳述したものである。

◇同著　**西洋倫理學史**（古代中世篇）　一布冊裝定價金貳圓　送料金拾貳錢

◇同著　**西洋倫理學史**（近世篇上）　一布冊裝定價金參圓五拾錢　送料金拾八錢

◇廣島高師助教授 及川儀右衛門著　**國史上の思想問題**　一布冊裝定價金參圓八拾錢　送料金拾八錢

東京　寶文館　大阪

文學博士 山田孝雄序 御橋悳言著 （最新刊）

平家物語略解

菊版布裝一冊
定價金七圓八拾錢
送料金廿四錢

漢文學の輸入、佛教の渡來以後、我國の文藝は鎌倉時代に至りて完成の域に達したが、平家物語はこの時代の代表の書とも謂ふべきもので、漢文と國文との調和を見、文學としての佛教の發達を知らむと欲するには、平家物語を講究するに若くものがない。本書は著者多年の研鑽に成る平家物語證註の略述で、もと初學者の伴侶たらしめむが爲のものなれば、これを平家物語略解と名づけたが、世に詳解といへるものに對しては、更に詳解と稱すべきものに屬するが、凡そ平家ざれば、そのいはゆる詳解に於ける略解といへるものに對しては、更に詳解と稱すべきものに屬するが、凡そ平家物語一部の中に事實の證據あるものはその記錄を拔き、詞句の典據あるものはその出典を擧げ、讀者の爲に解說をなすの要ありと思はるゝ語は、概念を得らるべきを程度として洩すことなくみな註釋を施し、從來の誤を訂せるものも僅指するに堪へざるものあり。故に本書は啻に平家の讀者に利益を與ふるのみならず、他の國文を讀む上にも亦必須の書なることを斷言す。なほ卷尾には典據及び語釋の索引を添附して披讀の便に供せり。

東北帝大教授文學博士
山田孝雄著

假名遣の歷史

日本文法界の最高權威山田孝雄博士の近著で本書は從來の假名遣の歷史中に誤られてゐる多くの點を指摘してこれを正したるもので、從つて假名遣の本質を闡明し從來誤考されてゐた假名遣の諸點を正確に認識することが出來るものである。邦語を語り邦語を書く者の何人も必讀すべき必須の書

菊判洋裝全一冊
定價金一圓
送料金八錢

日本文法論

從來諸說紛々として歸する處を知らざりし國文法を著者は該博なる學殖を以て精確に從來の諸說を比較評論し且つ英獨學者の說を參酌して科學的に歸納的に統一し、茲に不拔の學說を樹て我が國文典の基礎を確立されたのである。卽ち本書は日本文典界の絕對權威書として他の追從を許さゞる歷史的名著で堂々一千五百餘頁の大冊

菊判金一冊
定價金十圓
送料金卅錢

日本文法講義

菊判
定價金四圓五十錢
一冊
送料金十八錢

敬語法の研究

菊判
定價金三圓八十錢
一冊
送料金十二錢

日本口語法講義

菊判
定價金三圓八十錢
一冊
送料金十二錢

萬葉集講義 卷第一

菊判
定價金三圓五十錢
一冊
送料金十二錢

東京 寶文館 大阪

終